

II. 事業結果

(1) 事業対象者の属性

1) 対象者の居住地区

回答者 45 人について居住地区を尋ねたところ、「葵区」が 8 人 (17.8%)、「駿河区」が 21 人 (46.7%)、「清水区」が 16 人 (35.6%) であった。

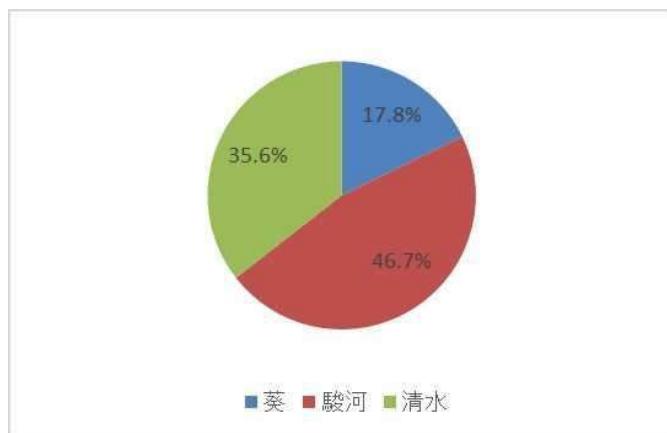


図 1-1 対象者の居住地区

2) 対象者の年齢

回答者 45 人について年齢を尋ねたところ、「75」が 10 人 (22.2%)、「76」が 13 人 (28.9%)、「77」が 5 人 (11.1%)、「78」が 6 人 (13.3%)、「79」が 11 人 (24.4%)、であった。

なお、年齢の平均は 76.9 歳、標準偏差は 1.5 であった。

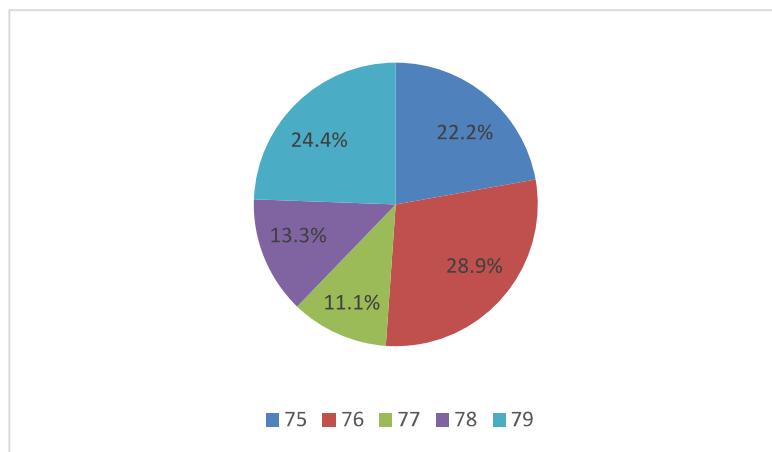


図 1-2 対象者の年齢

3) 対象者の性別

回答者 45 人について性別を尋ねたところ、「男」が 12 人 (26.7%)、「女」が 33 人 (73.3%) であった。

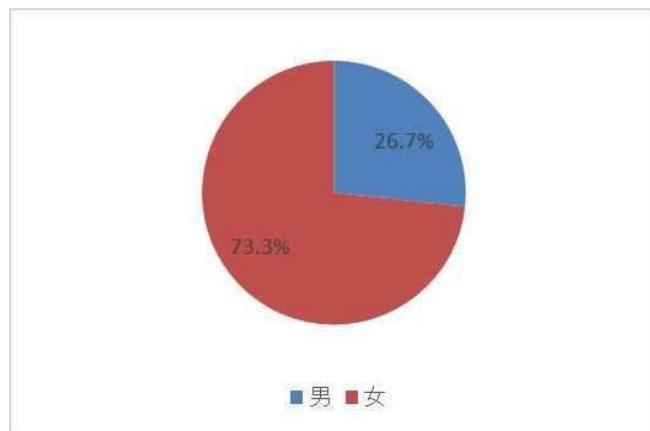


図 1-3 対象者の性別

(2) 後期高齢者の質問票（様式第 2 号）からみた事業対象者の特徴

1) 現在の健康状態

回答者 45 人について現在の健康状態を尋ねたところ、「よい」が 3 人 (6.7%)、「まあよい」が 8 人 (17.8%)、「ふつう」が 24 人 (53.3%)、「あまりよくない」が 8 人 (17.8%)、「よくない」が 2 人 (4.4%) であった。

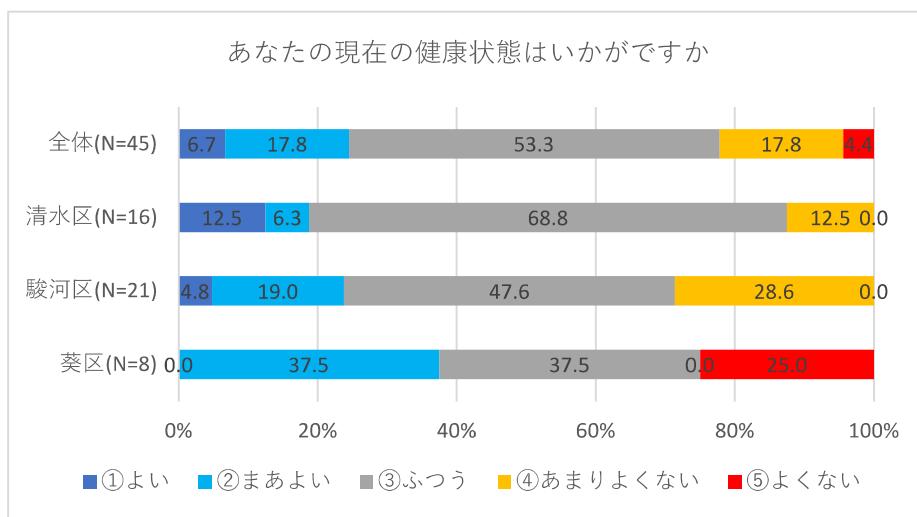


図 2-1 現在の健康状態

2) 每日の生活への満足度

回答者 45 人について毎日の生活への満足度を尋ねたところ、「満足」が 17 人(37.8%)、「やや満足」が 20 人 (44.4%)、「やや不満」が 7 人 (15.6%)、「不満」が 1 人 (2.2%) であった。

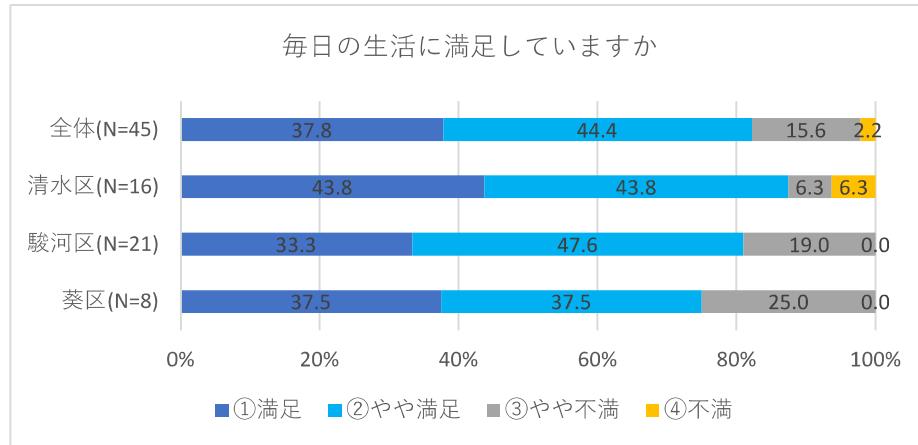


図 2-2 每日の生活への満足度

3) 1 日 3 食食べているか

回答者 45 人について 1 日 3 食食べているかを尋ねたところ、「はい」が 40 人(88.9%)、「いいえ」が 5 人 (11.1%) であった。

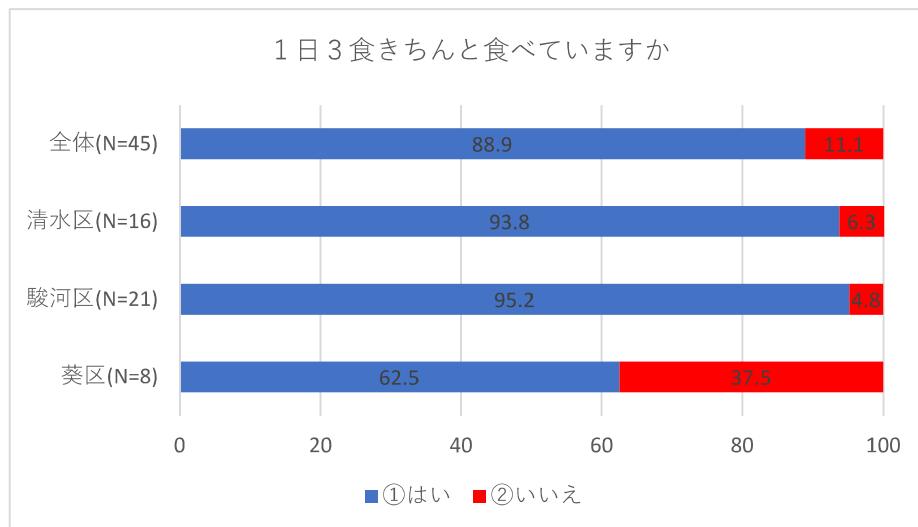


図 2-3 1 日 3 食食べているか

4) 半年前に比べて硬いものが食べにくくなかったか

回答者 45 人について半年前に比べて硬いもの（さきいか、たくあんなど）が食べにくくなかったかを尋ねたところ、「はい」が 11 人 (24.4%)、「いいえ」が 34 人 (75.6%) であった。

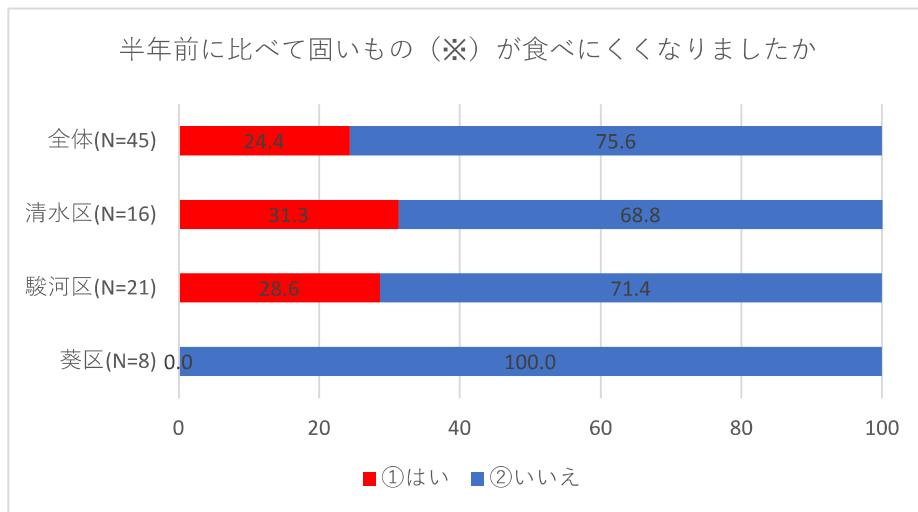


図 2-4 半年前に比べて硬いものが食べにくくなかったか

5) お茶や汁物でむせることがあるか

回答者 45 人についてお茶や汁物でむせることがあるかを尋ねたところ、「はい」が 11 人 (24.4%)、「いいえ」が 34 人 (75.6%) であった。

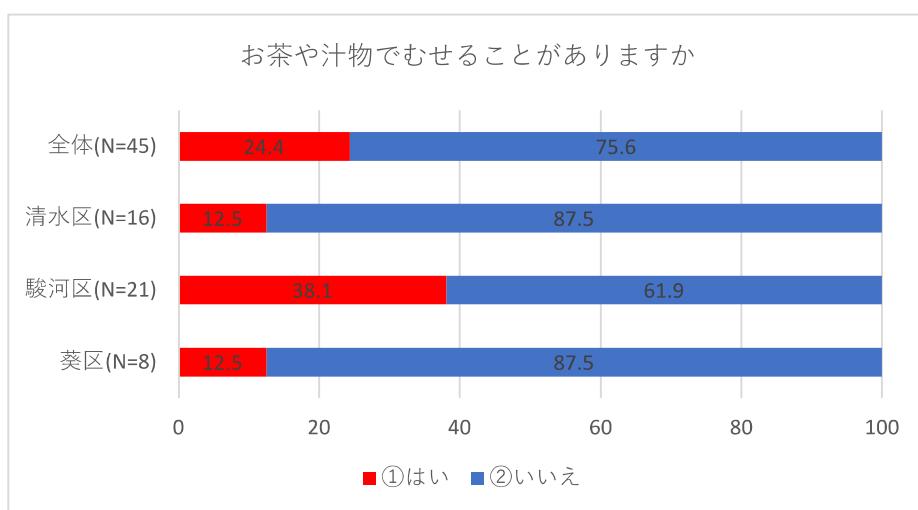


図 2-5 お茶や汁物でむせることがあるか

6) 6カ月間で2~3kg以上の体重減少があったか

回答者45人について6カ月間で2~3kg以上の体重減少があったかを尋ねたところ、「はい」が2人(4.4%)、「いいえ」が43人(95.6%)であった。

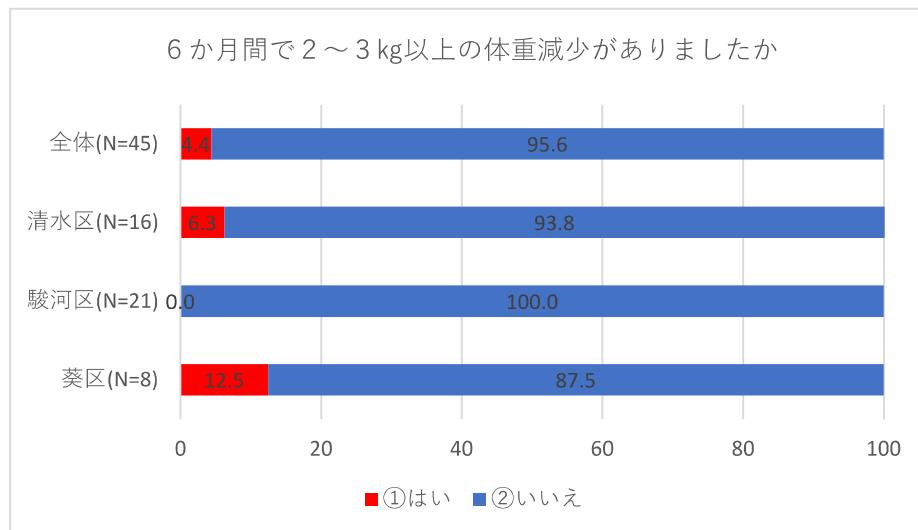


図2-6 6カ月間で2~3kg以上の体重減少があったか

7) 以前に比べて歩く速度が遅くなったか

回答者45人について以前に比べて歩く速度が遅くなったかを尋ねたところ、「はい」が30人(66.7%)、「いいえ」が15人(33.3%)であった。

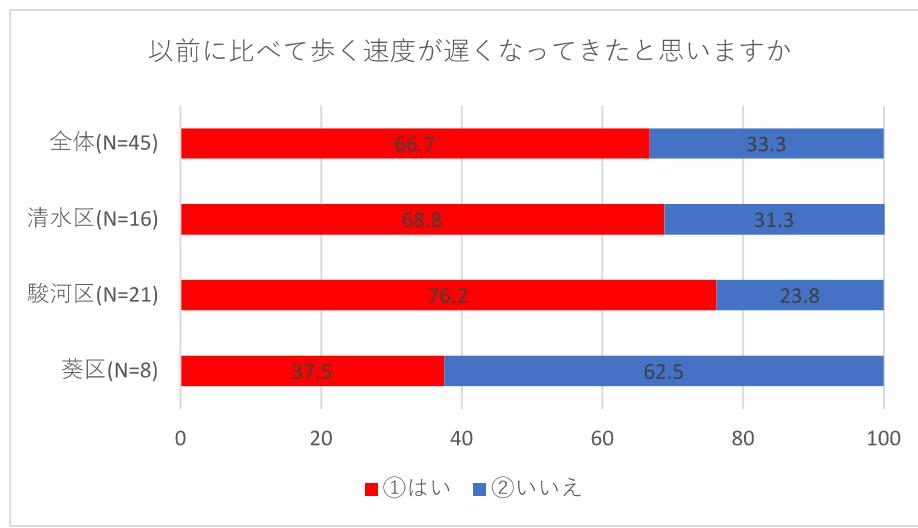


図2-7 以前に比べて歩く速度が遅くなったか

8) この1年間で転んだことがあるか

回答者45人についてこの1年間で転んだことがあるかを尋ねたところ、「はい」が14人(31.1%)、「いいえ」が31人(68.9%)であった。

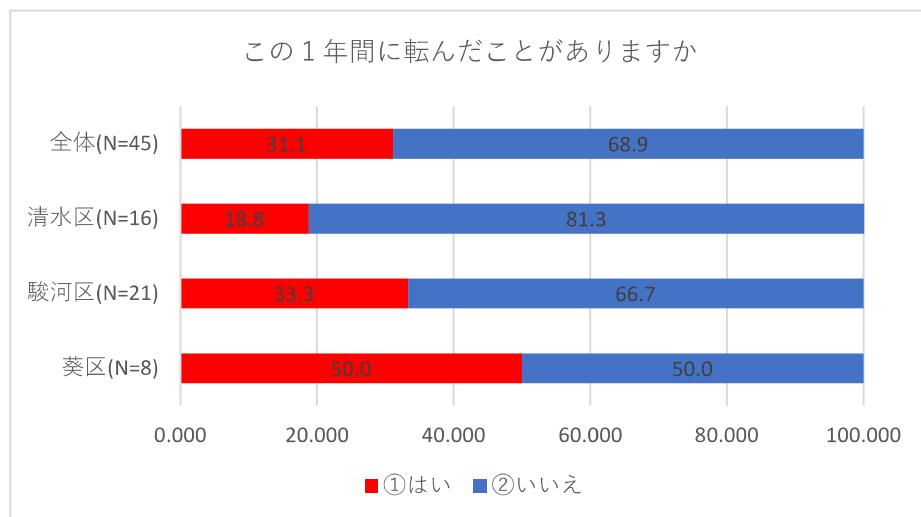


図2-8 この1年間で転んだことがあるか

9) 運動を週に1回以上しているか

回答者45人について運動を週に1回以上しているかを尋ねたところ、「はい」が28人(62.2%)、「いいえ」が17人(37.8%)であった。

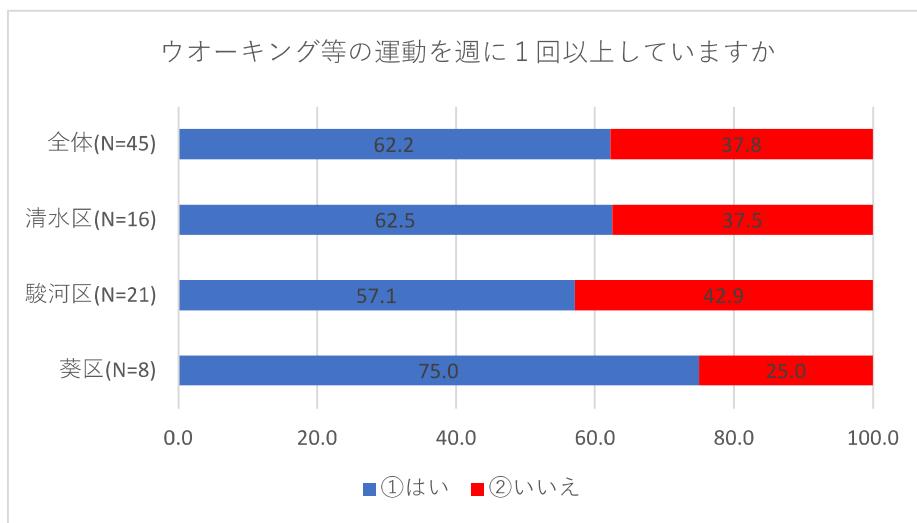


図2-9 運動を週に1回以上しているか

10) 物忘れがあると言われるか

回答者 45 人について物忘れがあると言われるかを尋ねたところ、「はい」が 6 人 (13.3%)、「いいえ」が 39 人 (86.7%) であった。

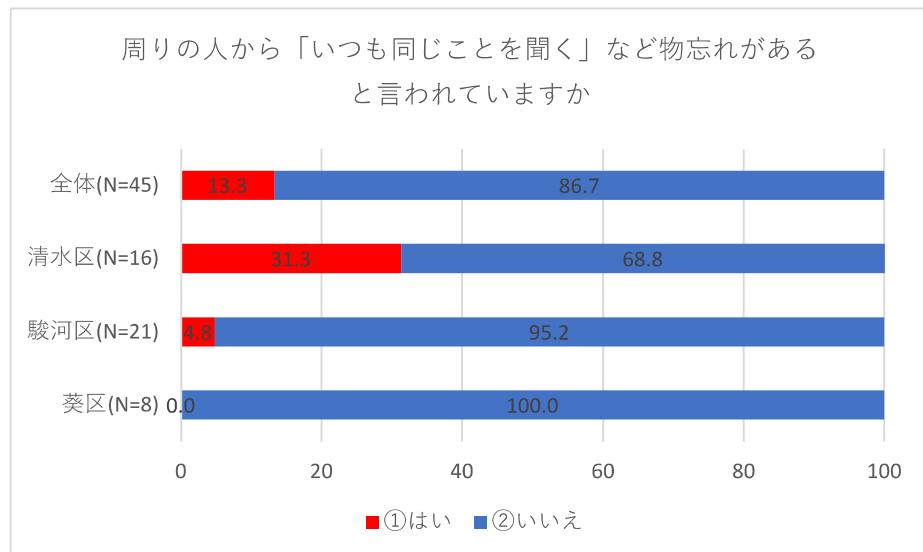


図 2-10 物忘れがあると言われるか

11) 今日が何年何月何日かわからない時があるか

回答者 45 人について今日が何年何月何日かわからない時があるかを尋ねたところ、「はい」が 9 人 (20.0%)、「いいえ」が 36 人 (80.0%) であった。

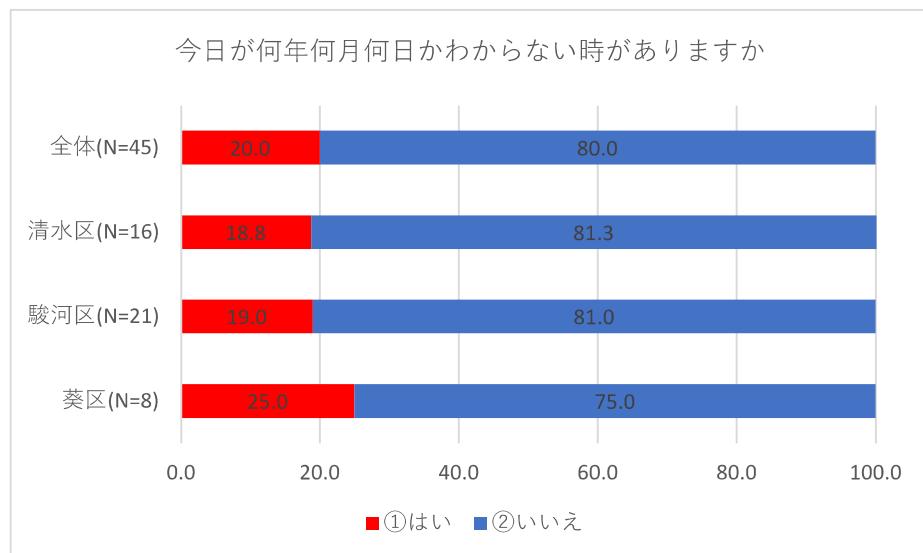


図 2-11 今日が何年何月何日かわからない時があるか

12) たばこを吸うか

回答者 45 人についてたばこを吸うかを尋ねたところ、「吸っている」が 4 人(8.9%)、「吸っていない」が 36 人 (80.0%)、「やめた」が 5 人 (11.1%) であった。

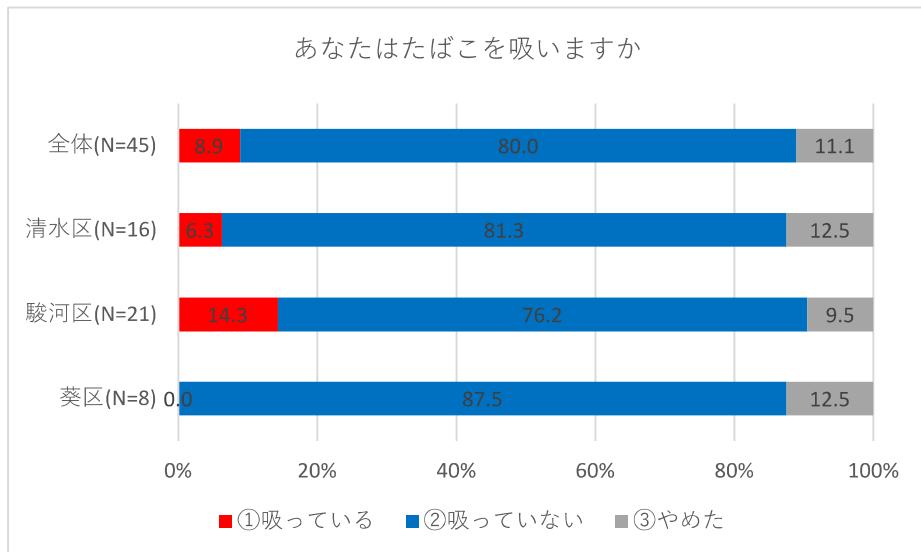


図 2-12 たばこを吸うか

13) 週に 1 回以上外出するか

回答者 45 人について週に 1 回以上外出するかを尋ねたところ、「はい」が 40 人 (88.9%)、「いいえ」が 5 人 (11.1%) であった。

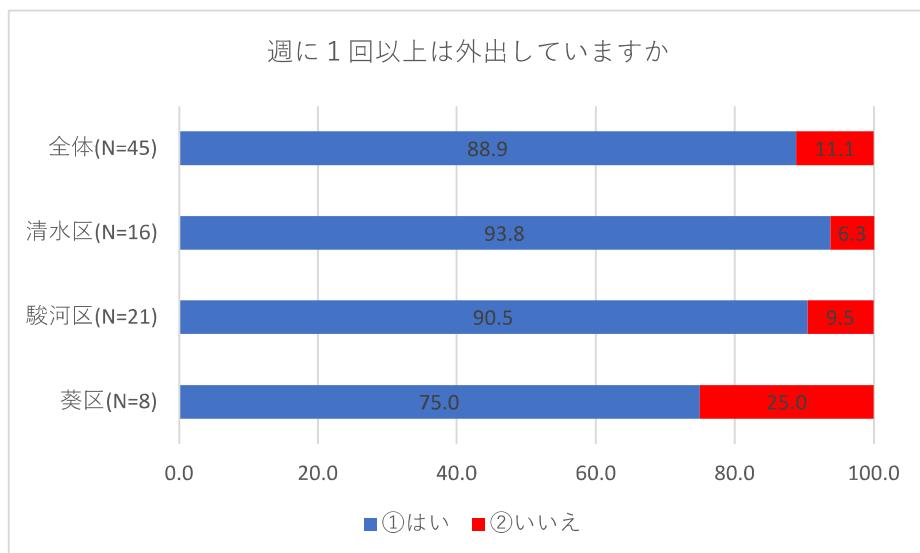


図 2-13 週に 1 回以上外出するか

14) ふだんから家族や友人と付き合いがあるか

回答者 45 人についてふだんから家族や友人と付き合いがあるかを尋ねたところ、「はい」が 40 人 (88.9%)、「いいえ」が 5 人 (11.1%) であった。

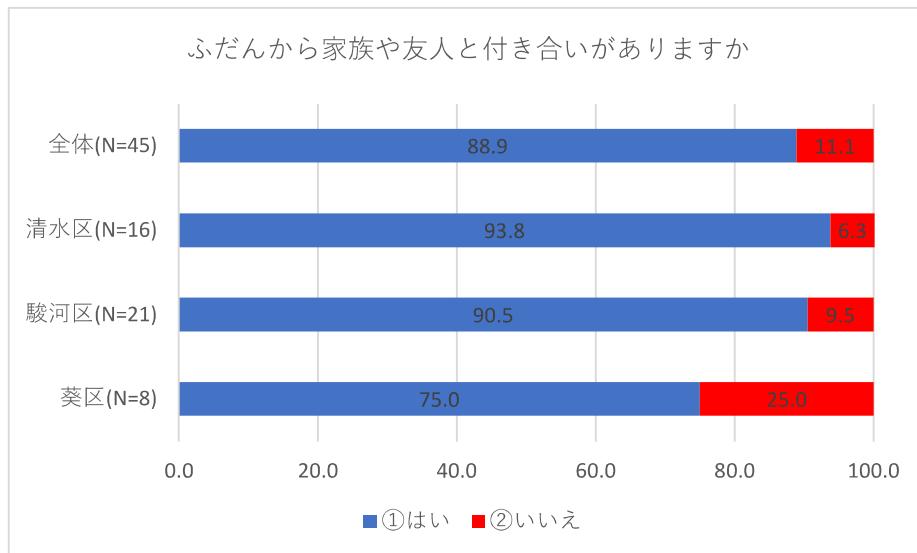


図 2-14 ふだんから家族や友人と付き合いがあるか

15) 体調が悪いときに身近に相談できる人がいるか

回答者 45 人について体調が悪いときに身近に相談できる人がいるかを尋ねたところ、「はい」が 40 人 (88.9%)、「いいえ」が 5 人 (11.1%) であった。

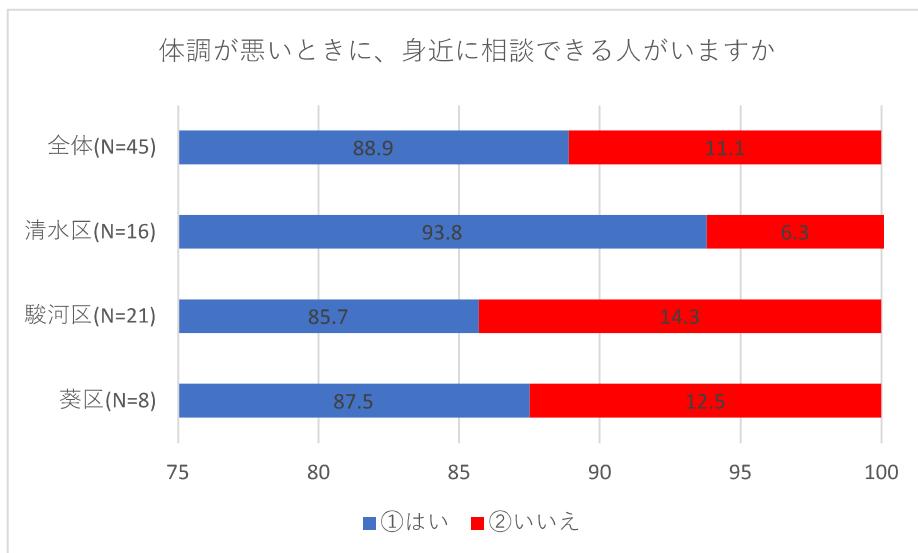


図 2-15 体調が悪いときに身近に相談できる人がいるか

(3) かかりつけ医による総合評価結果

1) フレイルの状況

回答者 45 人の総合的評価結果について、「プレフレイル（身体的）」19 人（42.2%）が最多であり、次いで「フレイル（身体的）」11 人（24.4%）、「プレフレイル（精神的）」7 人（15.6%）、「フレイル（社会的）」6 人（13.3%）となっていた。

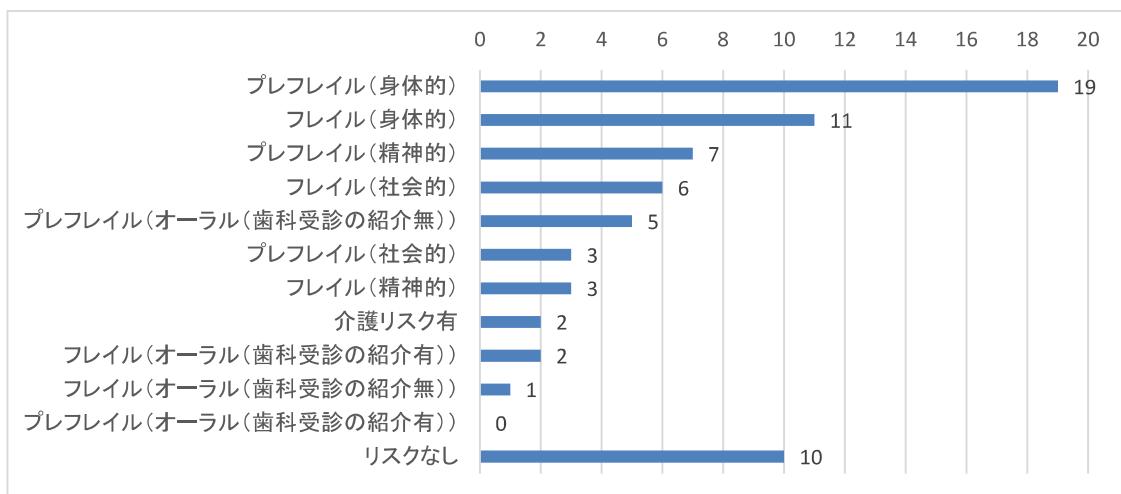


図 3-1 フレイルの状況

2) 有効と考えられる事業

回答者 45 人に有効と考えられる事業について、「運動等身体活動（しづ～かでん伝体操等運動機能向上事業）」22 人（48.9%）が最多であり、次いで「交流の場（老人会、シニアクラブ等地域の通いの場）」19 人（42.2%）、「運動等身体活動（グランドゴルフ等の地域のスポーツ活動）」14 人（31.1%）、「介護予防・生活支援サービス事業（総合事業）」13 人（28.9%）となっていた。

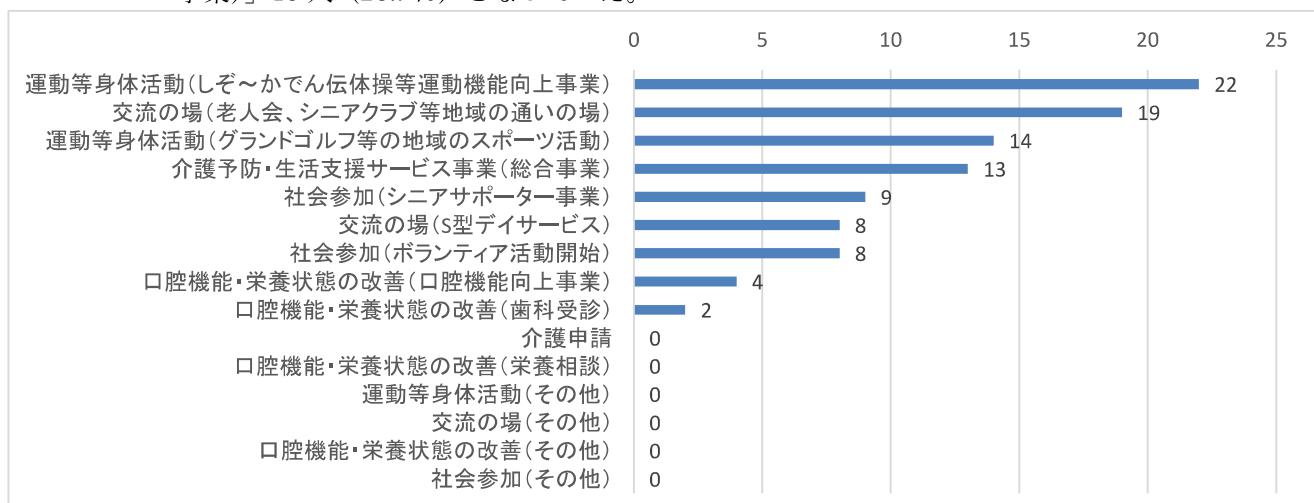


図 3-2 有効と考えられる事業

3) 地域包括支援センターが紹介した事業

回答者 45 人への紹介事業について、「運動等身体活動（しづ～かでん伝体操等運動機能向上事業）」13 人（28.9%）が最多であり、次いで「交流の場（S型デイサービス）」6 人（13.3%）、「社会参加（ボランティア活動開始）」3 人（6.7%）となっていた。

また、「その他」の回答で得られた内容としては、「まるけあ手帳の活用」などが挙げられていた。

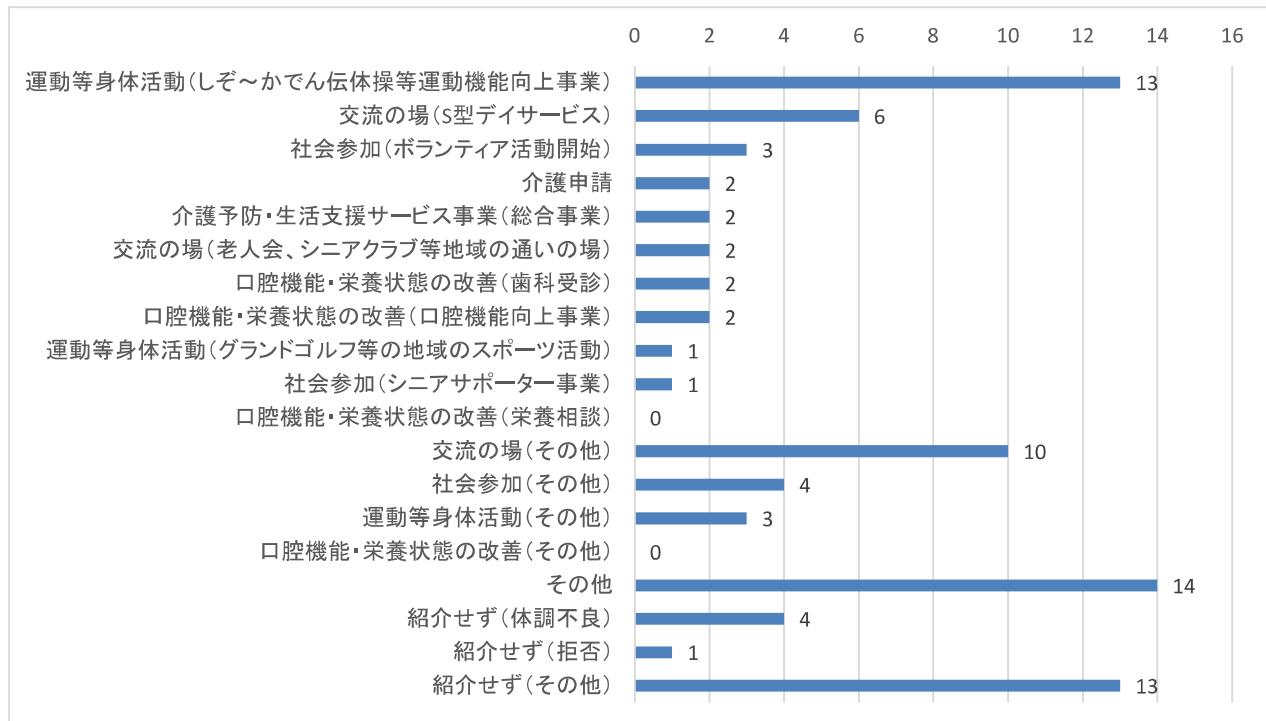


図 3-3 地域包括支援センターが紹介した事業

4) 地域包括支援センターとのその後のかかわり

回答者 45 人の地域包括支援センターとのその後のかかわりについて、「終了」が 39 人（90.7%）、「継続」が 4 人（9.3%）であった。

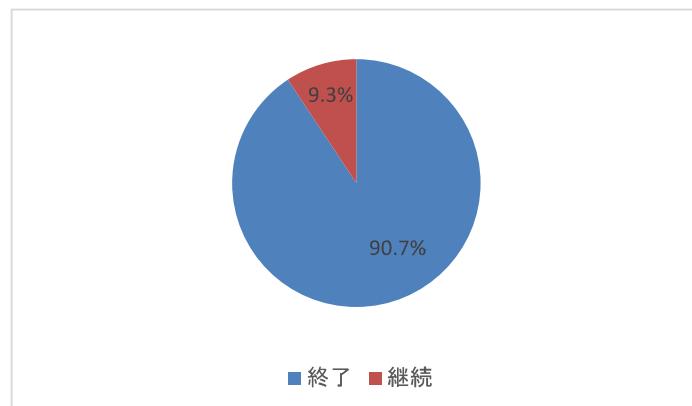


図 3-4 地域包括支援センターとのその後のかかわり

(4) 事業実施後のアンケート調査結果

1) 現在の健康状態

有効回答者 44 人について現在の健康状態を尋ねたところ、「よい」が 11 人(25.0%)、「まあよい」が 10 人(22.7%)、「ふつう」が 13 人(29.5%)、「あまりよくない」が 7 人(15.9%)、「よくない」が 3 人(6.8%)であった。

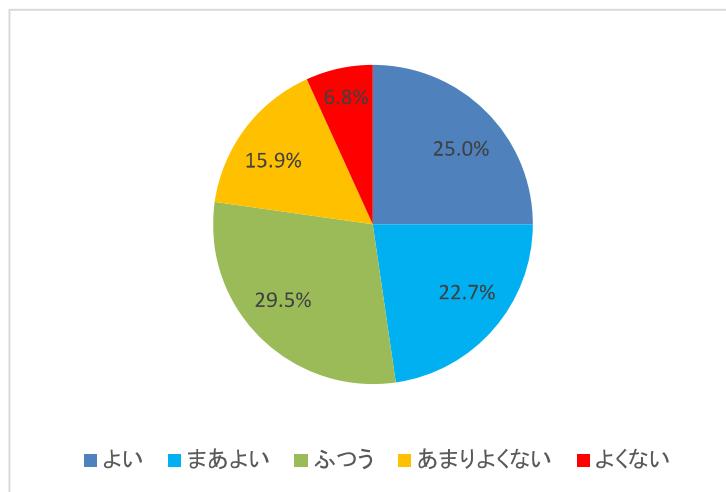


図 4-1 現在の健康状態

2) 地域包括支援センターから紹介された活動や地域の集いの場等を利用したか

有効回答者 44 人について地域包括支援センターから紹介された活動や地域の集いの場等を利用したかを尋ねたところ、「はい」が 12 人(27.3%)、「いいえ」が 32 人(72.7%)であった。

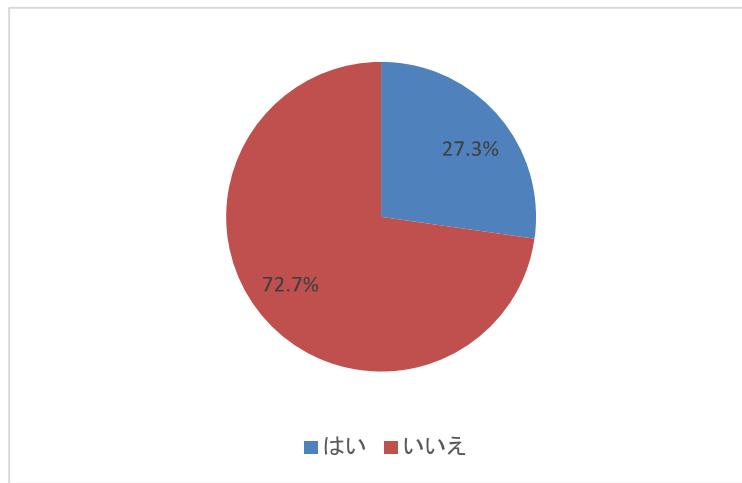


図 4-2 地域包括支援センターから紹介された活動や地域の集いの場等を利用したか

3) 紹介された地域の集いの場等をこれからも継続して利用しようと思うか

「地域包括支援センターから紹介された活動や地域の集いの場等を利用したか」で「はい」を選択した 12 人に対し紹介された地域の集いの場等をこれからも継続して利用しようと思うかを尋ねたところ、「はい」が 12 人（100.0%）であった。

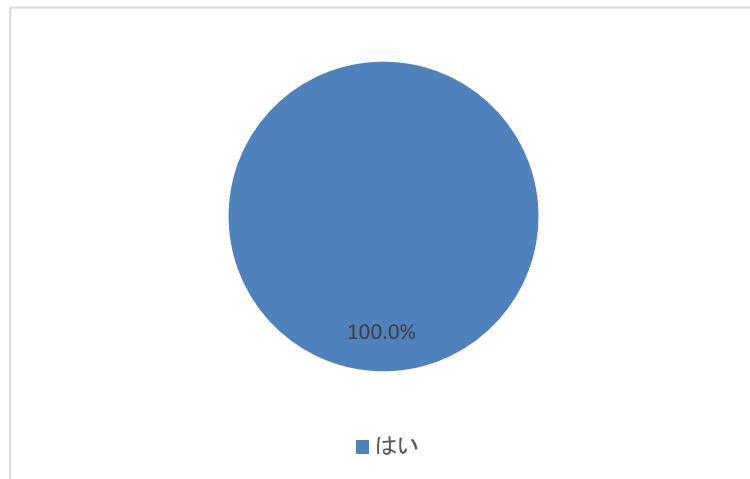


図 4-3 紹介された地域の集いの場等をこれからも継続して利用しようと思うか

4) 紹介された地域の集いの場等を周囲の人に勧めたいと思うか

有効回答者数 13 人に対し、紹介された地域の集いの場等を周囲の人に勧めたいと思うかを尋ねたところ、「はい」が 11 人（84.6%）、「いいえ」が 2 人（15.4%）であった。

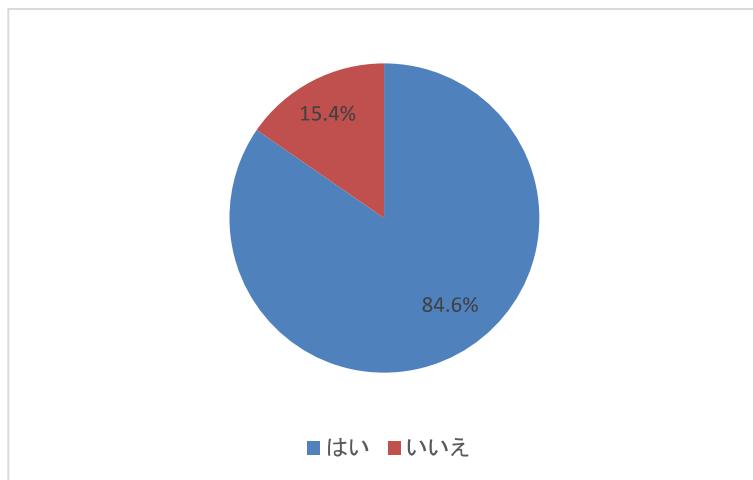


図 4-4 紹介された地域の集いの場等を周囲の人に勧めたいと思うか

5) 紹介された地域の集いの場等を利用していない理由

有効回答者数 33 人に対し、紹介された地域の集いの場等を利用していない理由を尋ねたところ、「時間が無い」6 人（18.2%）、「体調が悪い」6 人（18.2%）、「紹介されていない」6 人（18.2%）が最多であり、次いで「まだ早い」5 人（15.2%）、「紹介された活動や地域の通いの場等とは違う活動を利用している」5 人（15.2%）、「興味がない」4 人（12.1%）となっていた。また、「その他」の回答で得られた内容としては、「地域自治会役員と神社氏子の役員の兼務」などが挙げられていた。

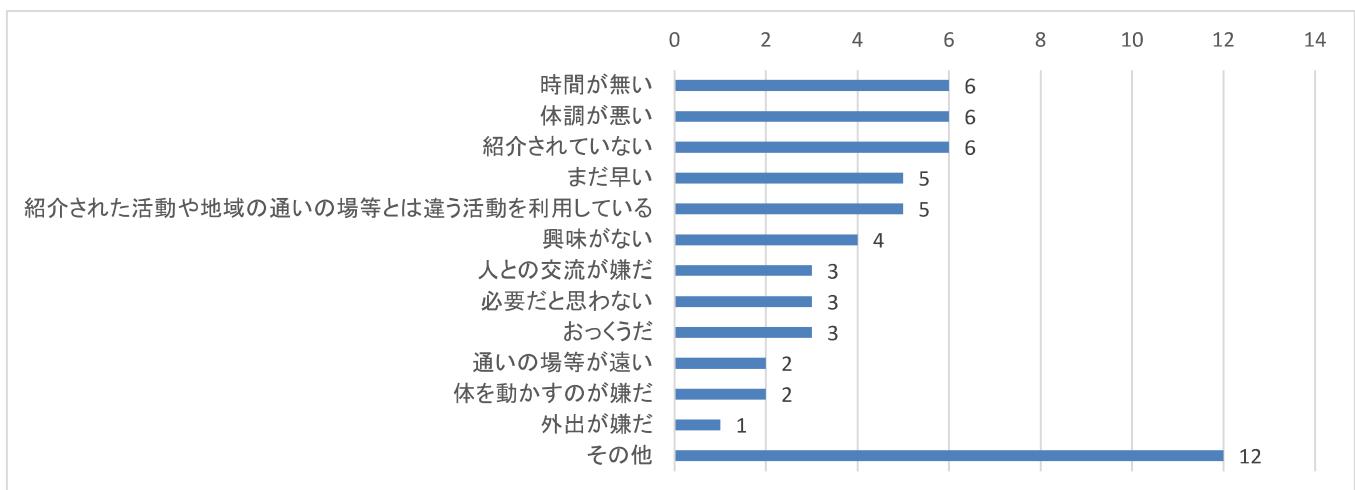


図 4-5 紹介された地域の集いの場等を利用していない理由

6) かかりつけ医による心身の健康状態のチェックが、通いの場等を利用するきっかけになったと思うか

有効回答者 42 人について、かかりつけ医による心身の健康状態のチェックが、通いの場等を利用するきっかけになったと思うかを尋ねたところ、「とてもそう思う」が 5 人（11.9%）、「そう思う」が 17 人（40.5%）、「あまりそう思わない」が 16 人（38.1%）、「全くそう思わない」が 4 人（9.5%）であった。

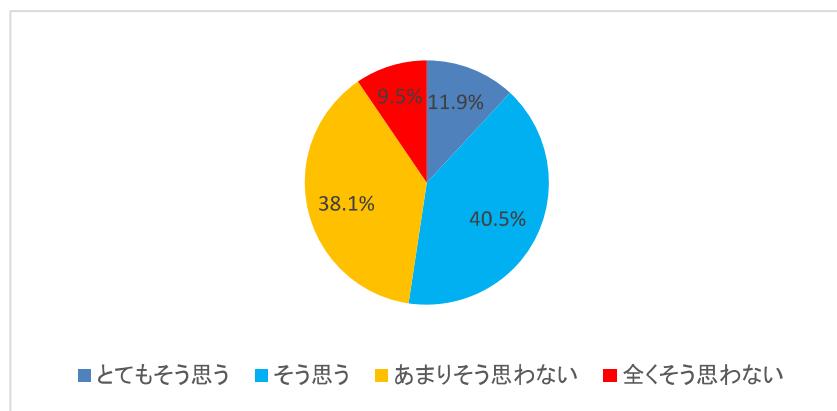


図 4-6 かかりつけ医による心身の健康状態のチェックが、通いの場等を利用するきっかけになったと思うか

7)かかりつけ医による心身の健康状態のチェックがきっかけで、フレイル予防や介護予防について関心が高まったか

有効回答者 44 人についてかかりつけ医による心身の健康状態のチェックがきっかけで、フレイル予防や介護予防について関心が高まったかを尋ねたところ、「とても高まった」が 11 人 (25.0%)、「高まった」が 19 人 (43.2%)、「あまり高まらない」が 12 人 (27.3%)、「全く高まらない」が 2 人 (4.5%) であった。

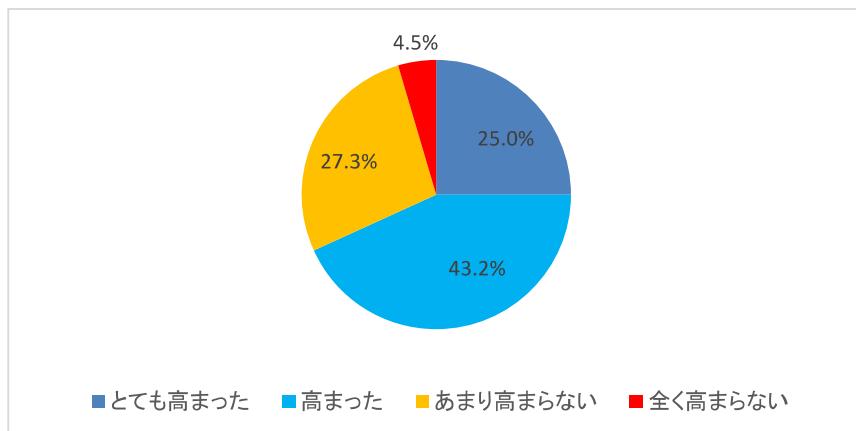


図 4-7 かかりつけ医による心身の健康状態のチェックがきっかけで、フレイル予防や介護予防について関心が高まったか

8)かかりつけ医による心身の健康状態のチェックがきっかけで、社会とのかかわりを持とうと思うようになったか

有効回答者 44 人についてかかりつけ医による心身の健康状態のチェックがきっかけで、社会とのかかわりを持とうと思うようになったかを尋ねたところ、「とてもそう思う」が 5 人 (11.4%)、「そう思う」が 22 人 (50.0%)、「あまりそう思わない」が 16 人 (36.4%)、「全くそう思わない」が 1 人 (2.3%) であった。

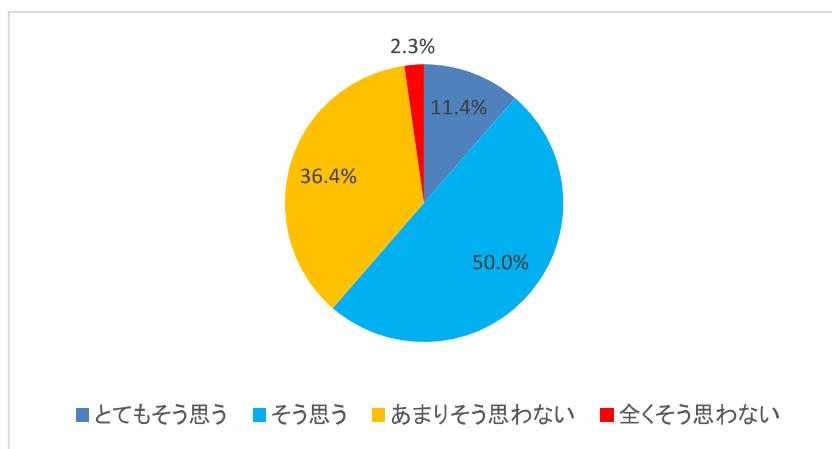


図 4-8 かかりつけ医による心身の健康状態のチェックがきっかけで、社会とのかかわりを持とうと思うようになったか

9) 本事業を周囲に勧めたいと思うか

有効回答者 43 人について本事業を周囲に勧めたいと思うかを尋ねたところ、「はい」が 27 人 (62.8%)、「いいえ」が 16 人 (37.2%) であった。

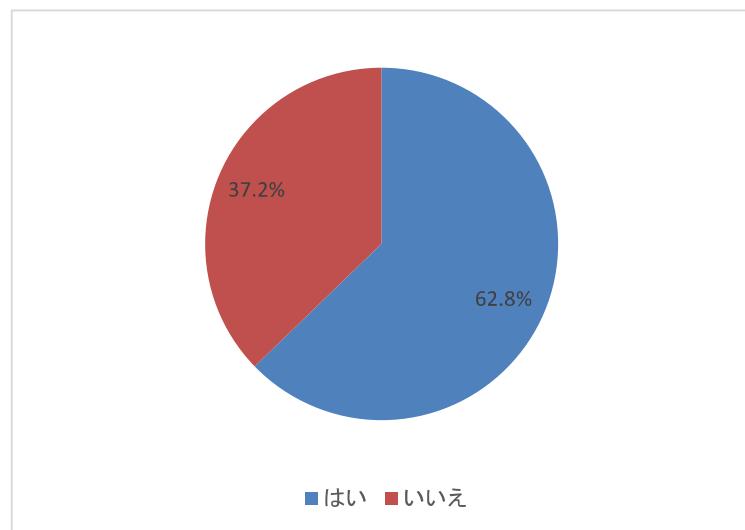


図 4-9 本事業を周囲に勧めたいと思うか

10) 自由記述

- i) 普段の生活に関する事
- 自分のペースで一日を無駄なく過ごしています。朝起きると 6000 歩 (50 分) のウォーキング、ピアノ、昭和歌謡、童謡、思い出の曲、漢字が好きで毎日勉強しています。
 - 現在は、家内と 2 人で元気に室内運動を毎日 15~17 種類をして、透析の無い日には 4 キロ程を歩いています。今、ゲートボールやグランドゴルフには興味が無いです。
 - なるべく運動（歩行）をするようになった。今までみたいにゴロゴロしてはいけないと思った。骨粗しょう症も注意しながら生活している。
 - 私は以前、編物教室に通っていました。コロナ前は、体操教室にも行っていました。コロナでストップになり、かかりつけチェックにより、いろいろ知り行動できました。
 - 体力のおとろえと共に人との交流が負担に感じてきます。健康を保つ為に、早くから心掛けした方が良いと思いました。私の場合地域のボランティア活動をしておりますので、生活は充実しております。
 - かかりつけ医や友達にボランティアを進められていて、考えています。集音器で音楽と会話はできます。
 - 年齢的に体の事は不安や心配はしています。経済的な事も考えてお金を使わない

よう、そして子供たちに迷惑をかけないよう何とかストレスをためないよう 1 日 1 日を明るく過ごせたらと思います。

- 体力も低下していますし、いずれ支援をいただいたら、ヘルパーさんにお世話をお願いしたりする日も近いと思います。自分でできる間は日常の事も続けて行きたいと思っています。
- 足は痛いですが、とりあえず元気にはしています。
- お客様と接することが大好きです。ますます健康でありたいと思いました。

ii) 活動に参加した感想

- 今まで町内の方と知り合う機会がありませんでしたが、S型たんぽぽ東新田ボランティアに行きはじめ、知り合いができ楽しみとなりました。利用者さんの喜ぶ顔を見て私自身の喜びとなる事がわかりました。
- でん伝体操をやっている会場が近くに無いので、今は遠くの会場に行っています。近くにあると良いのですが。
- 町内の知らない人とも知り合いになりよかったです。
- 参加型の人と、不参加型の人との個人差が出ます。

iii) 参加困難事由

- 行こうと思ったら転んでしまったため、体調が改善したら行こうと思う。(2, 3月に1回ずつ転倒してしまい、痛みが走るため動くのが大変。注意していても転んでしまった。)
- 福地先生のリハビリに毎日通っている。通いの場等の利用が必要と思っているが体を動かすことが大変。(腰痛、膝痛)
- 体調不良のため余裕がない。
- 必要な取り組みだとは思いますが、何かきっかけがないと行きだせないと思います。
- かかりつけ医が寝たきり予防の事を少しお話しただけで通いの場の紹介とかありません。

iv) その他

- アンケートを取って介護予防に役立ててくださることは、とてもよい事だと思います。けれども、アンケート提出後の手間暇にご一考をお願いしたく思います。それと、出来たら無記名での記入にしてください。

- 一人暮らしだから心配が募ってしまう。これからも包括に相談に乗ってもらうつもりです。
- 先生にとても心配いただいて、惜しみない気遣いをいただきありがとうございます。
- これからも、ご指導よろしくお願ひいたします。
- 上手に利用できたら良いと思う
- とても良いことと思います。
- 多発性肺がんになってしまい、終末期医療を開始することとなった。

(5) フレイルの状況別にみた事業実施後のアンケート調査結果

1) その後の健康状態

フレイルの状況別にみたその後の健康状態については、身体的フレイルに関しては、「あまりよくない」「よくない」と回答した割合が、約4割を超えており、精神的フレイル、社会的フレイルとその割合が大きくなる傾向がみられた。

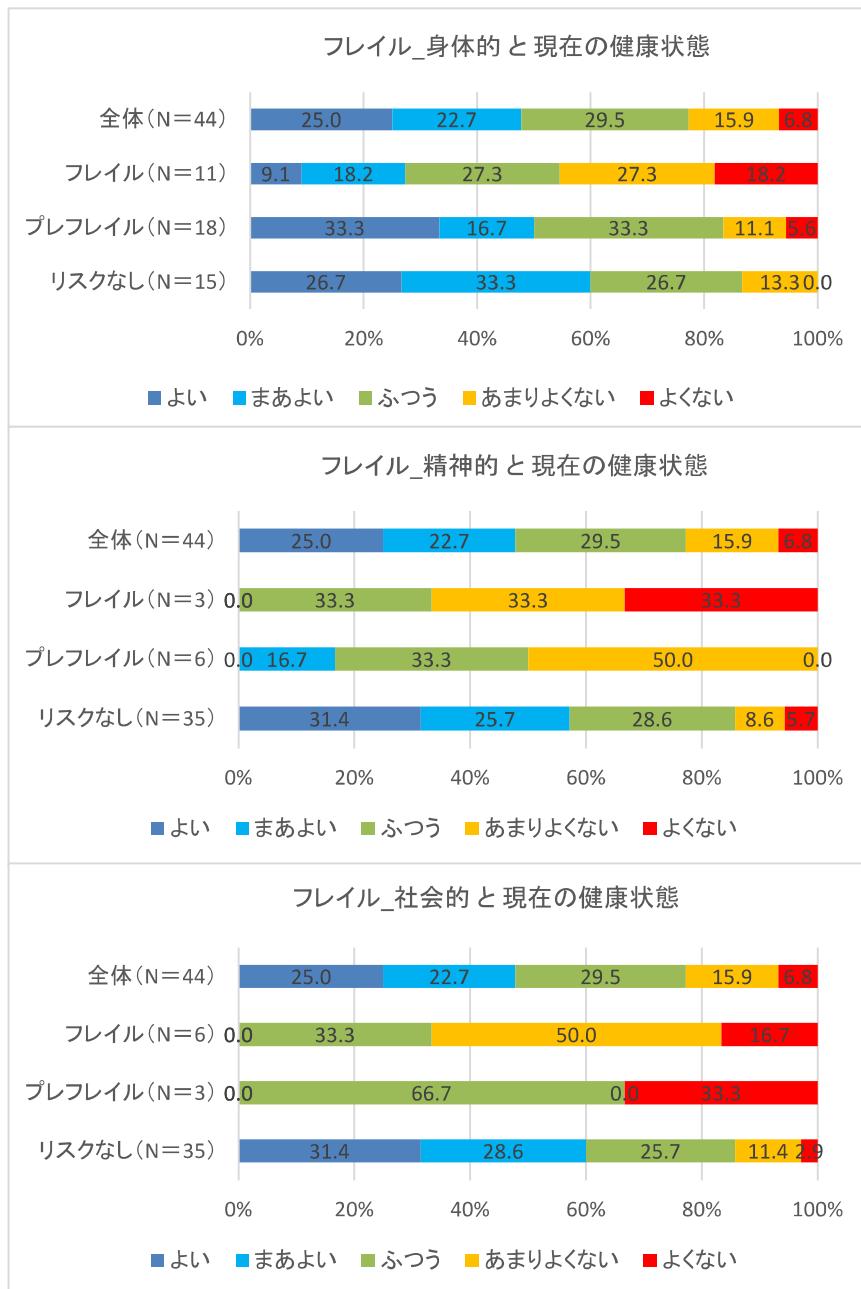


図 5-1 フレイルの状況別にみたその後の健康状態

2) 地域包括支援センターから紹介された活動や地域の集いの場等を利用したか

フレイルの状況別に地域包括支援センターから紹介された活動や地域の集いの場等を利用したかに関しては、どのフレイルに関しても、「いいえ」と回答した割合が約6割を超えており、プレフレイルであっても約6割を超えている傾向がみられた。

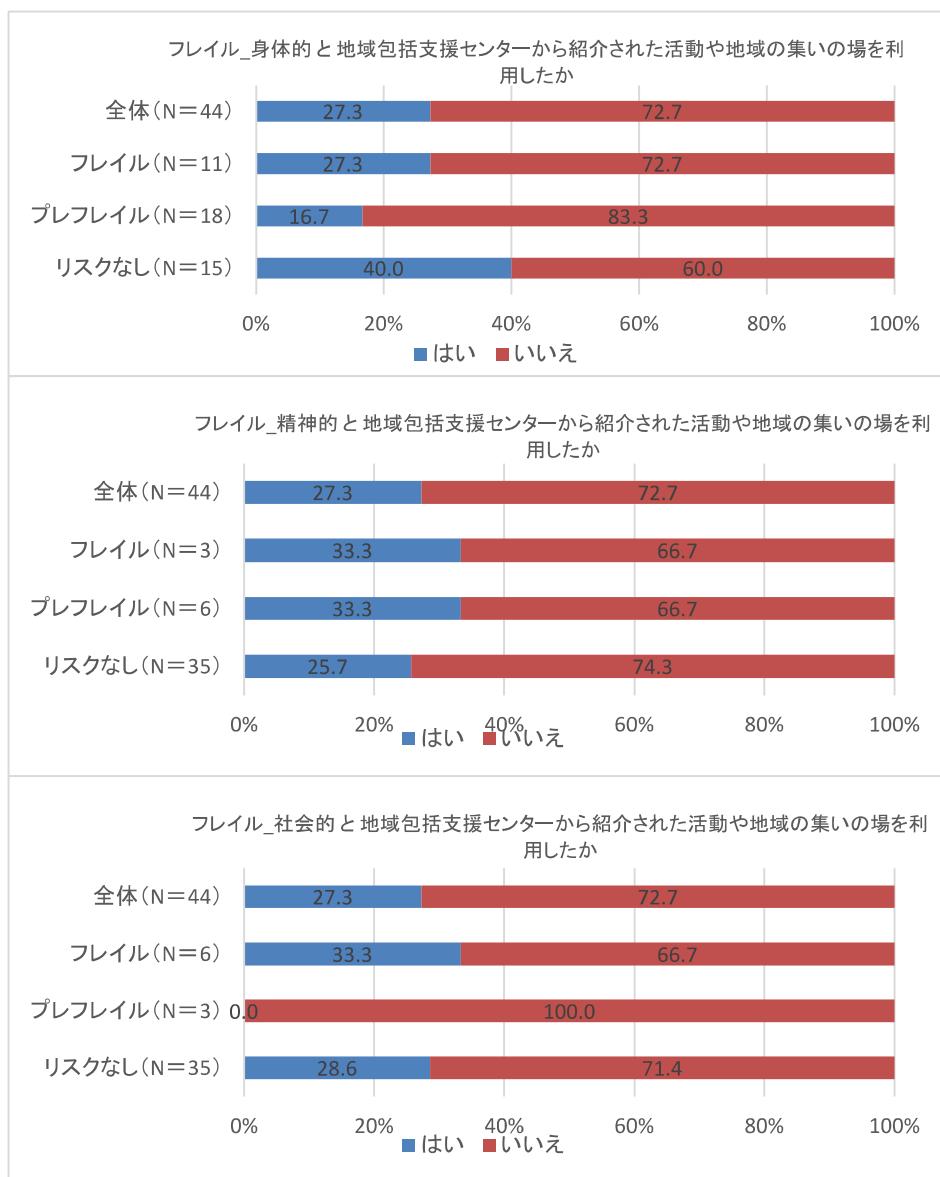


図5-2 フレイルの状況別にみた地域包括支援センターから紹介された活動や地域の集いの場等を利用したか

3) かかりつけ医による心身の健康状態のチェックが、通いの場等を利用するきっかけになったと思うか

フレイルの状況別にかかりつけ医による心身の健康状態のチェックが、通いの場等を利用するきっかけになったと思うかをみたところ、どのフレイルの状況でも「とてもそう思う」「そう思う」の割合がおよそ4割を超える傾向はみられたものの、身体的フレイルに関しては「全くそう思わない」と回答した割合が約2割、精神的フレイルに関しては約3割、社会的フレイルに関しては2割であった。

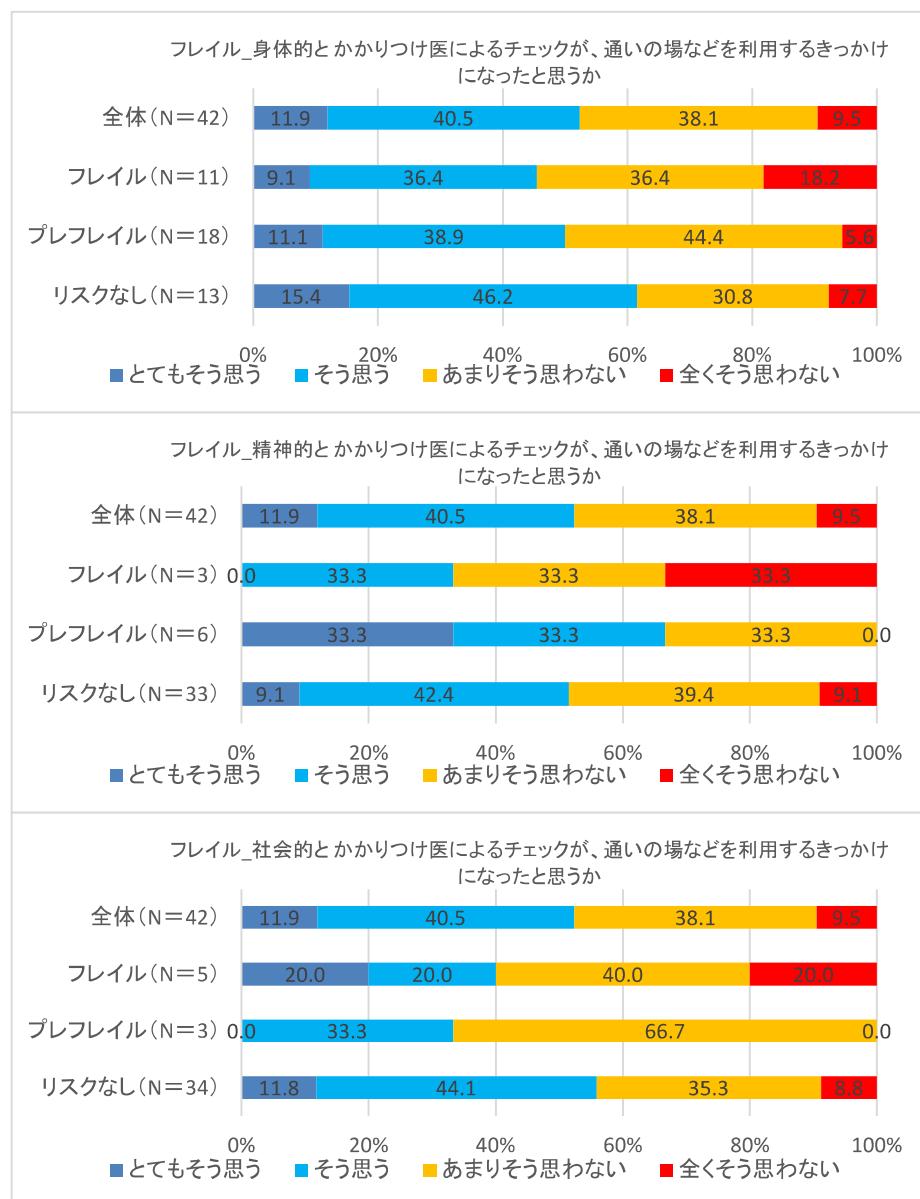


図5-3 フレイルの状況別にみたかかりつけ医による心身の健康状態のチェックが、通いの場等を利用するきっかけになったと思うか

4) かかりつけ医による心身の健康状態のチェックがきっかけで、フレイル予防や介護予防について関心が高まったか

フレイルの状況別にかかりつけ医による心身の健康状態のチェックがきっかけで、「身体的フレイル」「社会的フレイル」では「とてもそう思う」「そう思う」の割合がおよそ5割を超える傾向がみられた。

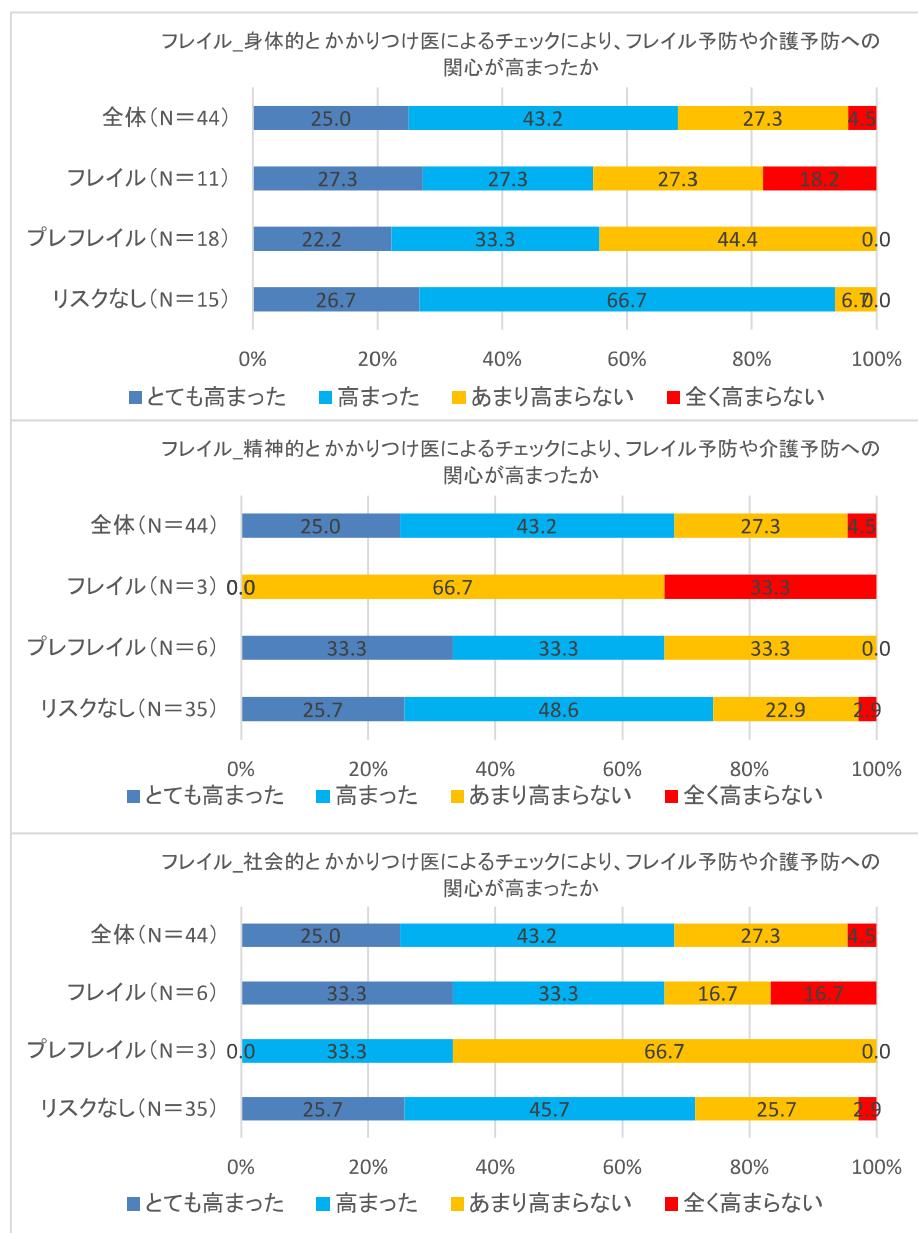


図5-4 フレイルの状況別にみたかかりつけ医による心身の健康状態のチェックがきっかけで、フレイル予防や介護予防について関心が高まったか

5) かかりつけ医による心身の健康状態のチェックがきっかけで、社会とのかかわりを持とうと思うようになったか

フレイルの状況別にかかりつけ医による心身の健康状態のチェックがきっかけで、社会とのかかわりを持とうと思うようになったかをみたところ、「身体的フレイル」「社会的フレイル」では「とてもそう思う」「そう思う」の割合がおよそ5割を超える傾向がみられた。

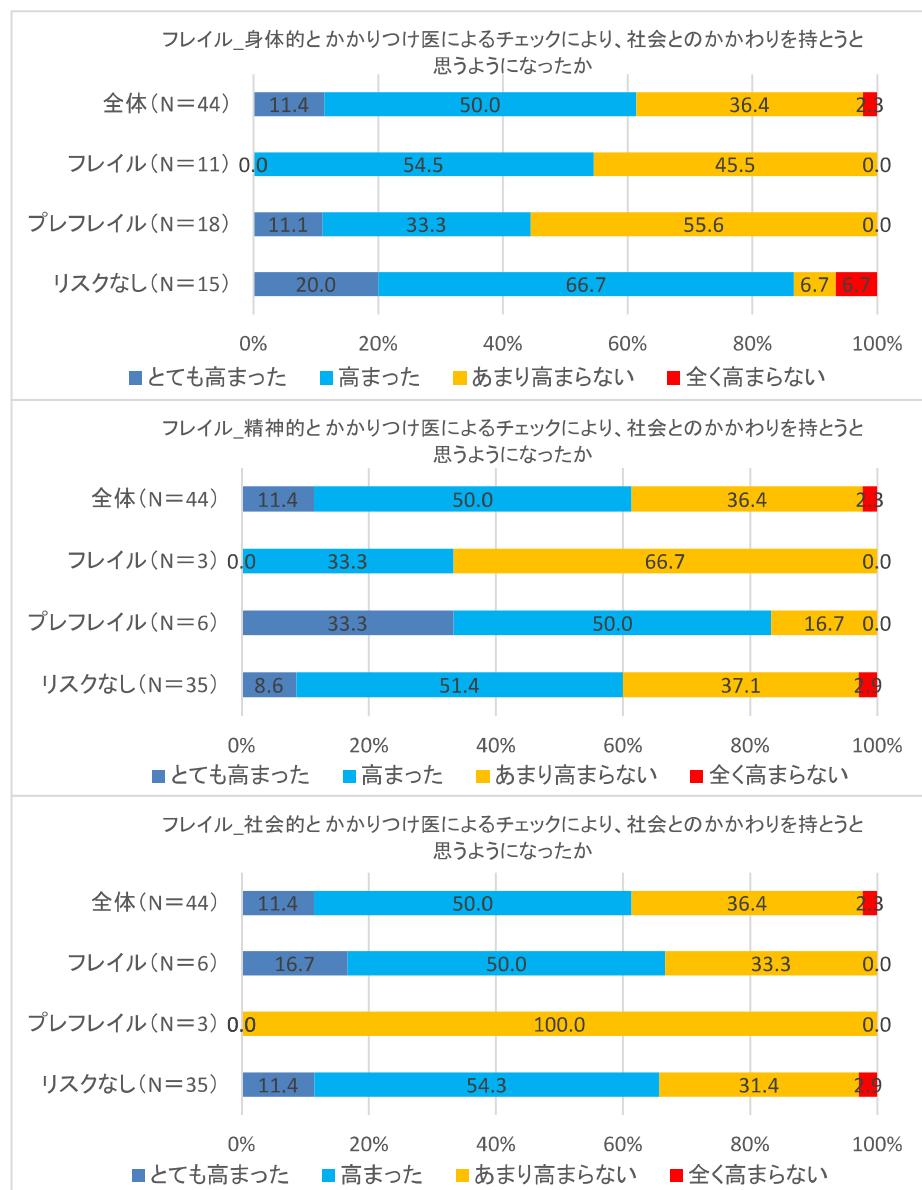


図 5-5 フレイルの状況別にみたかかりつけ医による心身の健康状態のチェックがきっかけで、社会とのかかわりを持とうと思うようになったか

6) 本事業を周囲に勧めたいと思うか

フレイルの状況別に本事業を周囲に勧めたいと思うかみたところ、「はい」と答えた対象者は「身体的フレイル」「精神的フレイル」では約7割、「社会的フレイル」でも約5割を超える傾向はみられた。

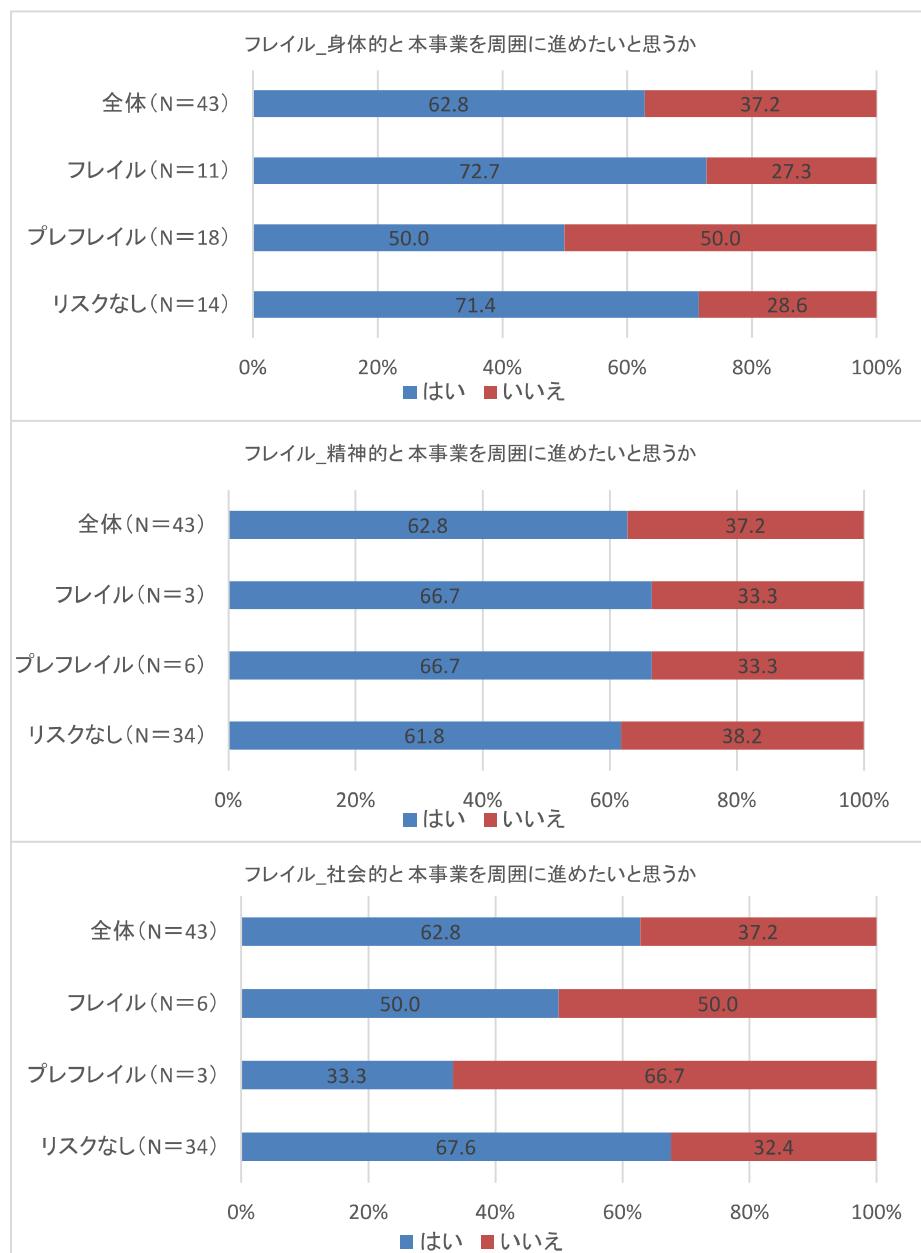


図 5-6 フレイルの状況別にみた本事業を周囲に勧めたいと思うか

III. 事業結果まとめ

(1) 本事業の対象者

今回事業に参加した事業対象者の健康状態の自己評価を見てみると、70%以上のほとんどの事業対象者が「よい」「まあよい」「ふつう」という評価をしており、比較的健康的な高齢者が多かったが、かかりつけ医による総合評価によるフレイルの評価においては、「身体的フレイル」または「身体的プレフレイル」と評価された人数は32名と71.1%の方が身体的なフレイルの兆候が見られるという結果であり、また、「精神的フレイル」または「精神的プレフレイル」と評価された人数は10名で22.2%、「社会的フレイル」または「社会的プレフレイル」と評価された人数は9名と20.0%存在していた。対象者によっては、複数のフレイルの兆候を持っている方も13名と28.9%存在していることから、自己評価である健康状態と客観的にみたフレイルの状況には、乖離があることが示された。

また、後期高齢者の質問票（様式第2号）からみた事業対象者の特徴を概観すると、約90%の方が「1日3食食べている」状況であり、「体重の大幅な減少」もみられず、毎日の生活への満足度について、約80%以上の方が満足感を得ている状況がうかがえるが、日常生活の細かな部分において、以前の状況と異なる状況であることを感じている方が一定の割合で存在していることも明らかになった。

例えば、「硬いものが食べにくくなった」「お茶や汁物でもせる」「歩く速度が遅くなった」「1年間に転んだことがある」「今日が何年何月何日かわからない時がある」等の内容については約20%以上の方が以前の状況から変化を自己認識しており、実際の生活においては、その変化した内容をうまく取り入れながら生活を行っていることが想像できる。

健康意識に関しても、「運動を週に1回以上している」が60%で半数を超えており、90%を超える方が喫煙をしていない状況で、健康意識の高い方が多かったといえる。

社会参加の内容についても、「週に1回以上外出する」、「ふだんから家族や友人と付き合いがある」方が約90%程度いることが示されたが、「体調が悪いときに身近に相談できる人がいない」という方が11%程度いることも明らかになり、比較的健康的な生活を歩んでいく方に対しても相談できる体制の必要性も垣間見られた。

また、本事業では、今まであまり医療や介護サービスの対象者となっていない比較的健康的な高齢者が中心で、事業がなければ特に自ら関わりを持っていなかった対象者も多く、予防の観点からアプローチが必要な高齢者であるものの見つけられなかつた対象者ともいえる。効率的にこのような高齢者を受診につなげることは、フレイル予防や介護予防だけではなく疾病の早期発見や早期治療につながることから、事業対象者をはじめ、その家族や地域の住民に、健診受診の必要性及び重要性、未受診によるリスクや生活習慣の改善による効果等について常日頃から周知し、高齢者の特性を踏まえた保健事業への理解の促進を図っていく必要がある。

(2)本事業におけるかかりつけ医師の役割

本事業実施後のアンケート調査の結果をみてみると、「かかりつけ医による心身の健康状態のチェックが、通いの場等を利用するきっかけになったと思うか」については 52%が、「かかりつけ医による心身の健康状態のチェックがきっかけで、フレイル予防や介護予防について関心が高まったか」については 68%、「かかりつけ医による心身の健康状態のチェックがきっかけで、社会とのかかわりを持とうと思うようになったか」については 61%が、「とてもそう思う」もしくは「そう思う」と評価していた。

また、「本事業を周囲に勧めたいと思うか」については周囲に勧めたいと思う方が 27 人 (62.8%) であったことから、かかりつけ医によってフレイルに関する「総合的評価」を実施し、高齢者の状態に応じた介護予防サービス等につなげる仕組みをつくり、高齢者の介護予防を促進するという本事業の目的は、事業利用者からの視点では一定の効果があり推進していく価値はあると評価できる。

しかし、フレイルの状況別に各アンケート内容をみてみると、フレイル状態である事業対象者には「心身の健康状態のチェックが、通いの場等を利用するきっかけになったか」、「フレイル予防や介護予防について関心が高まったか」という内容に関して、「全くそうは思わない」「全く高まらない」と評価している対象者の割合が多く、本来なすべきフレイル対象者の意識や関心を高め地域の集いの場や介護予防の場につなげるという行動変容については、未だ至っていないという面も見られ、今後どのようにこうした対象者の行動変容を促していくべきか、この事業の内容について理解を得ていくかが課題であるといえる。

また、プレフレイル対象者においても、「あまりそうは思わない」「あまり高まらない」と評価した対象者が存在することから、予防の観点からもいかに早期の段階でこうした意識や関心を高めていくのか、健康的な状態を保ちつつ考えを持った行動を促していくこと、利用者の意欲の程度とその背景を配慮した上で、積極的な働きかけを行うことが求められる。

日常的にかかわりが深いかかりつけ医からのメッセージをどのようにとらえるのか、個々人の考え方があることも予想されるが、エビデンスベースで客観的な視点を持って事業対象者に行動を促せることができるのもかかりつけ医の役割であると考えられる。

フレイルの情報からどのように地域資源につなげるかという視点で考えていくと、医師の知見とより多くの地域の状況を組み合わせながらケアをコーディネートしていく必要があるが、社会的処方はかかりつけ医のみが努力することによって成り立つわけではない。

保健事業と介護予防の一体的実施については、地域の中での保健、医療、介護、福祉の中で展開されることが前提であることから、多くの他の専門職者とのかかわりを持ち、日常的な情報交換、効果的なサービスの提供、実施体制の構築を図っていく必要があると言える。

例えば、健康診断、歯科検診の受診、薬局での薬剤の受け取り時等に高齢者の質問票に記入いただいた情報をかかりつけ医や地域包括支援センターが共有できることが可能となれば、医師の負担軽減の一助となり、多職種連携のきっかけとも成り得る。事業の効率化を図ることが今後の事業展開に求められる。

(3)かかりつけ医師、地域包括支援センターからみた事業の在り方

本事業において、事業対象者において、かかりつけ医から有効であると評価を受けた事業内容については、「運動等身体活動(しづ～かでん伝体操等運動機能向上事業)」22人(48.9%)が最多であり、半数近くの方へ紹介がなされていることが明らかになった。次いで「交流の場(老人会、シニアクラブ等地域の通いの場)」19人(42.2%)、「運動等身体活動(グランドゴルフ等の地域のスポーツ活動)」14人(31.1%)、「介護予防・生活支援サービス事業(総合事業)」13人(28.9%)となっていたが、運動等の身体的活動をおこなう事業への紹介が多くかった。フレイルの対象者の受け皿として、地域に充実した内容が備わっており、身体的活動の場への誘導がし易いという状況があるものの、他の内容については、フレイル対象者へのサービス内容等が明確になっていないこと、事業対象者にとって身近な存在となっていないことなどから、うまく繋げられないという問題もあるかと考えられる。

また、事後のアンケート調査結果から、地域包括支援センターから紹介された活動や地域の集いの場等を利用したかについては、「はい」が12人(27.3%)にとどまり、紹介された地域の集いの場等を利用していない理由をみてみると、「時間が無い」6人(18.2%)、「まだ早い」5人(15.2%)、「紹介された活動や地域の通いの場等とは違う活動を利用している」5人(15.2%)、「興味がない」4人(12.1%)などの理由も挙げられていた。

自由記載の中からも、既に自らがフレイル予防や介護予防に関するセルフケアの活動を行っていたり、既存の地域活動に参加している方も多くいたことからも、より一層、利用者自身が目的を持って活動ができる魅力的な場の創出が必要である。

かかりつけ医が社会的処方を行うにあたり、次につなげる事業の選択肢を今後どのように広げていくのか、かかりつけ医にとっても、事業利用者にとっても、利用し易い事業の在り方などを検討する余地はあると考えられる。

また、フレイル予防、介護予防を進めていくには、単に事業利用を促すだけでなく継続的な利用を促すことが大事である。特に介護予防とは、単に高齢者の一時的な運動機能や栄養状態の改善だけを目指すものではなく、これらの心身の状況改善はもとより、地域における住環境をはじめとした環境改善を通じて、個々の高齢者の生活機能や社会参加の機会を促し、一人ひとりの生きがいを創出し、生活の質の向上を目指すものである。

しかし、今回の事業においては、その後の健康状態は、身体的フレイル対象者に関しては、「あまりよくない」「よくない」と回答した割合が、約4割を超えており、精神的フレイル対象者、社会的フレイル対象者とその割合が大きくなる傾向がみられた。さらに、事業に期待することや介護予防の意識などについても、フレイル対象者については低く評価している対象者の割合が多いことから、こうした事業対者については、その後の伴走支援をしっかりと行いつかないところの事業自体が一過性のものであり、目指すべき心身の状況改善はもとより、介護予防を促進するまでは至らない結果となり得る可能性を示している。

一方、今回事業につないだ12名の方に関しては、紹介された地域の集いの場等をこれからも継続して利用する意向が確認できたが、その後の状況の変化については、どのようにモ

ニターしていくのか、地域包括支援センターとのその後のかかわりについては、「終了」が39人（90.7%）で「継続」が4人（9.3%）ということから、どの機関がその後の事業利用における効果をみながらどのように関わるのかという部分で課題があるといえる。

（4）事業運営からみた行政の課題

本事業において、事業運営に関する費用対効果については引き続き議論していく必要がある。また、この事業の効果を見るにあたり、保健事業実施後の健康状態やその結果の医療や介護費用の動向などの継続的なフォローが必要であり、中長期的に事業対象者の状態の経過把握が必要であるが、そのためには事業効果を測定するためのデータ収集とその分析を行う環境が整備されていることが求められる。

例えば、静岡茶っとシステム・KDBシステムを活用した地域課題の分析、医療・介護の情報を分析し、本事業対象者となりうる高齢者を抽出し、本事業へのつなぎがなされれば、より効果的に多くの事業対象者を受診につなぎ、その後の経過を分析することが可能となる。

また同時に、日常生活圏域の状況、地域健康課題を整理し分析することから、受け皿となる事業利用者にとって魅力ある事業を企画することも必要となってくる。

さらに、今回把握できなかった数値化できない質的情報等、指導の内容や事業対象者の反応、家族の感想、福祉関係者の対応状況など、事業評価に反映できるように、把握すべき内容の精査や把握方法について、関連部署とも連携してデザインしておくことが求められる。